

東欧行政視察記

横芝町長 佐瀬 哲司

〈その八〉

幸福過ぎる日本

大国の干渉続く西ドイツ

昔からドイツという国は、科学の面でも、芸術の面でも、また経済の面でも、非常に優れた民族であった。

しかしながら敗戦を境に、国が東と西に分割され、爾来三十七年を経過した今日まで、主義主張の異なる国家として対立関係が続いている姿を、この目ではっきりと確認してきたが、私は日本民族の今日の姿と比較し、わが国の戦後処理の有難さを痛感させられた。

西ドイツではアメリカの管理下にある土地がソ連に借り受けられ、そこに対ドイツ戦勝記念碑が建立され、ベルリン攻略戦で最初に入城した戦車や大砲が堂々と飾られ、ソ連の士官学校の優等生が毎日衛兵として勤務しており、西ドイツの軍人は一兵たりとも未だ西ベルリンには入れないまじりになっているし、また西ベルリンにある三か所の飛行場は、米・英・仏三か国が、それぞれ一か所ずつ管理しており、西ドイツの軍用機は勿論のこと、民間機の発着でさえ、東ドイツの上空を通過するという理

由で許可されない現状である。

国家分裂の悲劇

同一の民族が二つに分かれるという姿は、洋の東西を問わず悲劇である。これにひきかえ現在の日本は余りにも幸福過ぎるのではなからうかと、ふと恐ろしさを感じたり、これで良いのだろうかとか疑問を持ちたりする。

いよいよ西ドイツとも別れを告げて、フランスのドゴール空港へ向かう。機上から下界を眺めると、共産圏の東ドイツの農地は大型国营農場のため、整然と区画整理されているが、自由主義国の西ドイツは個人経営のため小型農場化している姿が明瞭に対比できた。

賑わうパリ

約二時間でパリの空港へ着陸した。このドゴール空港は、五年前に一度利用しているが、当時より拡張され、成田空港の三倍の広さ

を誇る大空港である。

広々として立派なロビーは、世界各国の人々で混雑していた。

世界中の若い画家が集まるモンマルトの丘で昼食をとったが、異常気象で低温続きだったパリもこの日は高温で28度もあり暑かった。

週末のため西ヨーロッパ各国の観光バスでどこも混雑を極め、旅行好きな西欧人の家族連れが非常に多く目についた。

外国人の旅行は家族中心で、日本人のように男性ばかりの団体旅行は皆無に等しく、民族性の違いかも知れないが、日本人は大いに反省すべきことだと感じた。

整然たる市街地

パリ市内の建物は、百年前に建てられた四〜七階建ての石の建物が昔のままの姿で在り、市内は高層建築が厳重に規制されているため、東京のように高層建築や平家建ての建物が混在するような姿はなく、古代的な美を備えた市街地が整然と形成されていた。

フランスの総人口の二割を占める一千万人が、パリを中心に集中している姿は、東京と同様であるが、現在公園方式による住宅地と

おみやげ品を売る

黒人たち



ショッピングの機能的な連繫を果たし得る団地を郊外に建設しているとのことだった。

市内の道路の両側は、自動車が平然と青空駐車しており驚かされた。その理由は、百〜二百年前にできた市街地のため、新しく車庫を造るだけの余裕地がないため路上駐車が許可されているとのことだった。そのため、日本のようにピカピカな車は殆んどなく、車ばかりは日本人ほど良いものに乗っている国民はいないと感じた。

自立つ黒人労働者

バスで市内見学に出かけたが、凱旋門、エッフェル塔、ノートルダム寺院、ドゴール広場、どこも観光客で満員であり、各観光地の盛り場には黒人の物売り、悪質写真屋、ジプシーの子供達の集団スリ等があり、どこの国でも同じ様な悩みがあると感じた。

東西ドイツ、ギリシャ、フランス

スト歩いてみて予想以上に黒人の多いことにも驚かされた。露店商人、ホテルや空港の掃除婦等に特に多く見受けられた。

日本車締出しに躍起

パリは生水が全然飲めない。その理由は石灰分が多いため下痢をすることであり、ビールが一本三百円で、同じ位のビン一本の飲料水が同価格とのことだった。

ガソリンは1ℓ百五十〜百六十円で日本と余り変わらない。

自動車はフランス国産のルノーが日本では有名だが、日本産の車がほとんど輸入されており、付加価値税三割をかけて規制している。オートバイは完全に日本製が独占しており、とても競争できないので50ccクラスは日本製の輸入を許可せず、国産製を保護しているが、その性能・外観は日本製とは全く比較にならない程粗悪である。

フランスは、農業の自給自足のできる国で、営農の平均面積は40haで、小麦、菜種、トウモロコシが主作物であり、果樹農家は平均面積17haとのことだった。

つづく